

## 擬似漢字系文字 2 (西夏文字)

■以下は西夏文字が鑄込まれた貨幣。



上：𐵄 “德、正、貞、平、靜”、右：𐵇 “觀、瞻、看” (動詞)、下：𐵇 “寶”、左：𐵇 “根本、根源” とあり、貞觀元宝と漢語に訳されている。

■この文字は 11 世紀には西夏文字が作られた。西夏の初代皇帝の李元昊(リゲンコウ)が、大臣の野利仁榮(ヤリジネイ)らに作らせ、西夏 (1038~1227 年) 建国直前の 1036 年に公布したとされる。

・元昊は自ら蕃書 (西夏文字) を作り、野利仁榮に命じてこれを演繹し、十二巻を成した。字形は方整で漢字の八分のようであり、その書は頗る重複したものであった。(『宋史』巻四百八十五「夏國上」)<sup>1</sup>

西夏は 1227 年にモンゴルのチンギス=ハンによって滅ぼされたが、その後もこの文字の使用例はあり、最も遅いもので明代中期 (1502 年) まで降る<sup>2</sup>。したがって、正式な国字としては 190 年余りに渡って使用され、西夏が滅んだ後も 275 年間は伝承されたことにな

---

<sup>1</sup> 『宋史』巻四百八十五「夏國上」に「元昊自制蕃書、命野利仁榮演繹之、成十二巻、字形體方整類八分、而書頗重複。……復改元大慶宋寶慶元年 (1036) 。」とある。「蕃書」とは西夏文字のことである。元昊が作り、野利仁榮に整えさせたとあるが、李錫厚・白濱・周峰 2005 の 125 頁にみえるように、元昊の主催の下、野利仁榮らによって作られたとするのが穏当であろう。

<sup>2</sup> 元代の貨幣にパスパ文字、アラビア文字、西夏文字、不明文字が鑄込まれた所謂「四体字錢」がある。また、北京の西北郊外の居庸関に元の至正五年 (1345 年) 築の過街塔と呼ばれる建築物がありその塔の内壁に西夏文字の文が刻まれている。さらに降って明代の弘治十五年 (1502 年) の年号を持つ西夏文の石幢がある。以上の諸資料は史金波・白濱・呉峰雲 1988 に掲載されている。

る。西夏文字は460年余りという意外にも長い歴史を持つ文字なのである。この文字は、チベット系の西夏語を表記した表意文字であり<sup>3</sup>、字形を方形にまとめ縦に右から左に向かって書く点は漢字のような印象を与える。たとえば、

- ・ “仏” は「𐰃」であり、左の「𐰄」は漢字の人偏に相当する。
- ・ “乗る” は「𐰇」であり、上部の「𐰈」は“人”を表わし、下部の「𐰉」は“馬”を表わす。

西夏人は『文海』という字典の中で、西夏文字の構造を、冠、偏、旁、脚などの要素に分けて説明しており、漢字の構造を彷彿とさせる。このような文字要素を組み合わせて文字を作る方法は漢字を模したものとされる。しかし、その文字要素は漢字と似ていない。なお、篆書体もあり、これは漢字の篆書体に学んだものである。

■さて、未知の表意文字はよほど条件が良くないと全面的な解読には至らない。その点西夏文字の場合、西夏語に訳された仏典、『番漢合時掌中珠』（西夏語と漢語の対訳語彙集）、字典などの様々な資料が残っており解読の条件に恵まれていた。初期の解読にあつては西夏語訳仏典や『番漢合時掌中珠』などの西夏文字西夏語と漢字漢文などが対応した資料（このような資料を対音対訳資料という）が有用であったが、その後、解読において決定的な役割を果たすこととなったのは当時の字典の解明であった。

この字典の解明はロシア人のニコライ・ネフスキー氏によってなされた。氏は、対音対訳資料によって得られた知識を利用して、西夏文字だけで書かれた字典を解明したのである。これによって、西夏文字と西夏語の体系的な知識を比較的短期間のうちに得ることができた<sup>4</sup>。このように西夏文字の場合、解読にとって理想的な条件の下にあったため研究は急速に進み<sup>5</sup>、6,000余りの文字はほとんど解明され、今では大部の字典もある<sup>6</sup>。今後は、これまでの説の修正と精密化がなされていくことであろう。

なお、この文字の魅力は何と言っても資料の豊富さにある。先にみた契丹文字の場合、主な資料は哀冊や墓誌銘であり、大字と小字をあわせても今のところ数十種にとどまる。解読されたとしても資料数や分野が限られており、影響は限定されたものであろう。その点、西夏文字で書かれた資料は様々な分野にわたっており数量も膨大なものとなっている。

---

<sup>3</sup> 西夏の国(1038-1227)は、現在の中国の西北であり、ちょうど東アジアと西アジアを結ぶ交通路の要衝にあたる。北はモンゴル語系の遼、西はチュルク語系のウイグル、東は漢語の北宋、南はチベット語系の吐蕃に接している。西夏という言葉はこの内、南に接するチベット語系の吐蕃の言葉と関係が深いということになる。

<sup>4</sup> 字典の解明にあつては、N.Nevsky1930が決定的な役割を果たした。

<sup>5</sup> 西田龍雄 1997 参照。

<sup>6</sup> 李範文編著 1997。

〈参考文献(発行年順)〉

N. Nevsky 1930. Concerning Tangut Dictionaries, 『狩野教授還暦記念支那学論集』 : 27-41  
頁+写真 2。東京・京都 : 弘文堂書房。

史金波・白濱・呉峰雲 1988. 『西夏文物』 北京 : 文物出版社。

李範文編著 1997. 『夏漢字典』 北京 : 中国社会科学出版社。

西田龍雄 1997. 『西夏王国の言語と文化』 東京 : 岩波書店。

李錫厚・白濱・周峰 2005. 『遼西夏金史研究』 福州市 : 福建人民出版社。

(文責 : 吉池孝一)